

アーユル・ヴェーダと心の病 —三大医書による比較検討—

長田 晋一

(九州大学大学院人文科学府博士後期課程1年)

【はじめに】

病と健康について実践的に考究する学問は医学である。一方、苦悩する者を癒し、救いに至る道を提示するのは宗教である。人間存在を直視し、生と死の双方に関わることが求められる点において、両者は軌を一にする。このような医学と宗教の親和的かつ相補的關係は、古代インドの伝統医学、すなわちアーユル・ヴェーダ (Āyurveda) の中に見出すことができる。

では、学問性と宗教性を兼ね備えたアーユル・ヴェーダは、心の病 (精神疾患) についていかに捉え、治癒への道を提示するのであろうか。このような問題にアプローチすべく、本発表では、アーユル・ヴェーダにおける心の病の構造について総合的に考察することを試みたい。

【対象と方法】

アーユル・ヴェーダには、系統の異なる二つの学問的伝統が存在する。すなわち、アートレーヤ系とダンヴァンタリ系である。前者は『チャラカ・サンヒター (Carakasamhitā)』を、後者は『スシュルタ・サンヒター (Suśrutasaṃhitā)』を生み出した。後世、これら二大伝統の成果は、『アシュターンガ・フリダヤ・サンヒター (Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā)』において折衷された。以上は、アーユル・ヴェーダの伝統において、三大医書として重要視されている。

これらの文献はいずれも、八つの科目 (アシュターンガ) より構成される。そのうちのひとつブータ・ヴィディヤー (bhūtavidyā、鬼神学) は、心の病に準ずる疾病についてのまとまった情報を提供している。

そこで、三大医書におけるブータ・ヴィディヤーに相当する章を対象に据え、文献学的手法を用いて分析を行うことにする。

【結果】

『チャラカ・サンヒター』は、心の病をウンマーダ (unmāda、精神異常) とアパスマーラ (apasmāra、てんかん) の二つに大別する。一方、『スシュルタ・サンヒター』と

『アシュターンガ・フリダヤ・サンヒター』では、上記に加え、グラハ（graha、憑きものによる病）という疾病に言及している。ここでいうグラハは、『チャラカ・サンヒター』のいうウンマーダの一種（外因性ウンマーダ）に相当している。

これらの疾病は、概して、内因性（ドーシャの異常による）、外因性（憑きもの、毒による）、心因性（苦悩による）の三つの観点に基づき分類されている。一方、治療法に関していえば、神的療法（バリ供養、マントラの低唱等）、合理的療法（生薬の合理的処方、浄化法等）、精神療法（慰め安心させること等）の三つが挙げられている。これらの治療法は、患者の症状に応じて適用される。

【考察と結語】

心の病に焦点を当てた場合、アーユル・ヴェーダの三大医書は、表現上は異なる点が見られるものの、内容の面では概ね共通した見解を示している。トリ・ドーシャ理論に基づく一方、ブータ（鬼神）やグラハ（憑きもの）といった超人間的存在の影響力を十分に踏まえて考察を展開するところに、生理学的側面と呪術的側面との交錯が見て取れる。ここに、古代インドにおいて心の病は複雑性をもつものとして理解されるとともに、その治療は一筋縄ではいかなかった模様を汲み取ることができよう。

キーワード：アーユル・ヴェーダ三大医書、心の病、生理学と呪術